四

運動会も近づいたある秋の日の夕方。おばさんが、真っ黒い顔を手拭いでふきながら、よしおの家にやってきました。あの日から、おばさんは、おじいさんの瓦工場の仕事を手伝っていました。

「よしお君。今日は、お願いがあってきたの。もうすぐ運動会でしょ？きみ子の親子競技に、よしお君、出てくれないかな？」

「おばさんは、出られないの？」

「今年の親子競技は、子どもを肩車して走る競技なのよ。おばさん、自信ないなあ。それに、他の家は、みんなお父さんが出るそうなの。」

「わかった。いいよ。任せといて！」

「ありがとう。助かったわ。ゆっくりでいいからね、無理しないでね。」

と、いうことでよしおは、きみちゃんの親子競技に出場することになったのです。よしおの町では、小学校と幼稚園が合同で運動会をしていました。